

中国、「これまで」と「これから」

－ 2つの「2つの中国」 －

樋泉克夫(愛知大学現代中国学部)

I】「これまで」の「2つの中国」

—— 対外閉鎖・平等から対外開放・格差容認へ

	49年から79年まで	79年以降～2012年
指導者	毛沢東（・・・華国鋒）	鄧小平⇒江沢民⇒胡錦濤
政権	中国共産党	
政治の目的（＝国是、国家目標）	革命 ○平等 ○自力更生 ≒ 儒教 ○自己犠牲 ○「専」より「紅」 ・・・▲為人民服務（滅私奉毛）	経済発展と生活水準の向上 ⇒貧困は社会主義ではない ⇒対外開放による外資・外国先進技術の積極導入（かつては「洋奴哲学」と全面否定） ⇒「白猫でも黒猫でも鼠を獲る猫がいい猫だ」 ・・・▲先富論
社会生活の基本単位	集団・・・社会の固定化 ○都市＝単位 ○農村＝合作社から人民公社 ・・・▲戸口制度	⇒個人・・・社会の流動化 ⇒単位 ⇒人民公社の解体（戸口制度の段階的緩和による余剰労働人口の都市への流入） 農民工→都市化の原動力
文化生活	絶対真理・絶対無謬である毛沢東思想を絶対基準とする一元化 ⇒政治は人民（労働者・農民・兵士）に奉仕すべきもの⇒社会主義的な“聖人君子”を目指す ・・・▲「八億の毛沢東」	過去の事績を含め共産党批判をしないかぎり多元的価値観を許容

II] 「これから」の「2つの中国」

——経済成長路線から大国化・中華民族大復興へ

- 江沢民＝走出去（海外への進出）＝2002年
- 胡錦濤＝所得倍増と海洋強国建設＝2012年
- 習近平＝偉大な中華民族の復興＝2012年

しかし・・・人口問題、環境、格差、民主、言論の自由など

1) 『中国大戦略』（葉自成 中国社会科学出版社 2003年）

「歴史の大転換と大変革こそ、大智慧を必要とする」と述べた後、「歴史が賦与する千載一遇の好機を捉えれば、中国は自力で世界大国に発展することができる。だが激しい国際競争のなかで好機を失えば、二流国家に成り果ててしまう」と指摘し、「中国は歴史において、こういった好機を2回失った」と、歴史を振り返る。

1回目は明代初期（1405～33年）。ヨーロッパで進む大航海時代への対応を誤り、国際貿易の主導権と海上覇権を失い、「二等国家として、最終的に西欧国家の侵略と圧迫を受けてしまった」。2回目は清朝末期（1860～70年）。「工業革命の潮流を違え、時宜に応じた改革と発展が出来ず、結果として国家基盤の上からは遥かに劣位に在った日本に敗れ果ててしまった」。そこで「中国は、この2つの歴史的失敗の中から教訓を汲み取るべきだ」と主張する。

著者は「21世紀初の日本は衰退過程にあるが、依然として世界大国の地位を競える国家である」と看做したうえで、①東アジアに覇を唱えようとする政治的野心を見せる右翼政治家は少なくないが、勇氣を持って事態に取り組まず、世界大国を目指す政治的胆力が見られない。②政治家は少なくないが、政治力と将来を見据えた大戦略を制定する政治的迫力・気魄を備えた指導者がいない。③模倣は得意だが、世界大国として必要不可欠な文明創造力を持たない。④商品や「円」は世界中に出回っているが、東アジアにおける「親和力」に欠ける——と、「世界大国になるために日本に欠けている4つの要因」を挙げる。

こうした日本と戦略的には「競争より共同発展」を目指し、①互いに両国関係の発展を阻害するような言動は慎む。②互いに東アジア政策を精査し、東アジアにおける多角的協力関係構築に積極的に取り組む。③日本はアジアの国々に対し友好協力関係を持つアジアの国家であるべきであり、アジアの中の欧米国家として振る舞ってはならない——とする。

2) 『大国思維 破解深藏于大国的思維奧妙』（王宇編著 湖南人民出版社 2010年）

改革・開放から30数年。中国は猛烈な速度で発展した。それゆえに中国社会には以前とは全く異なった仕組や勢力が生まれている。勝ち組もいれば負け組みもいる。だが総じていえることは大部分の中国人が中国と自らの将来に大きな自信を持っているということだろう。一方、国際環境の面から捉えてみると、比較的安定した30数年だったといえるが、

リーマンショック以来、地球規模で金融危機に見舞われながら、世界は新しい秩序の創出に苦慮している。

このような世界的な経済危機の渦中であって、新しい秩序を希求する国際社会は世界の東方に熱い眼差しを向けている。中国モデル、中国の責任、中国の形象が問われているのだ。ならば未来の中国は世界に対し如何なる影響を与えるべきか――

以上のように問題提起をした後、アヘン戦争敗戦以来の“自虐史観”を脱却し、弱国感情を克服せよ（第一章）。中国はアメリカに世界経済、科学技術、国際関係の面での「3つの真の戦」を挑み、ありうべき国際的な地位を勝ち取れ（第二章）。いまや中国は従前の「保守的思想」を克服し、他から影響を受ける「反応外交」から確固たる信念に基づいた「主動外交」に転ずるべき機会である。かくしてこそ地域の大国を脱し世界の大国へと向かう道が拓け、「中国の心」が「世界の心」を牽引することになる（第三章）。

改革・開放を機に中国は富強の道を歩みだし、自らの努力で「地獄を這い出し天国に辿り着いた」。もはや安価な労働力を外国ブランドに提供する時代は終わった。「愛国」こそが「国家の利益の要」だ。軽佻浮薄な文化を一掃し、21世紀初頭という絶好の機会を捉えるべきだ。いまや如何なる国家も中国の前進を阻むことなどできはなし。他の追随を許さない先進産業技術、原潜・空母を軸とする圧倒的国防力という「大国に相応しい大目標を持つ」（第四章）。かつての一時期の惨状を脱し、「いまや東方の大国は再び崛起し、世界の耳目を集めている」。であればこそ国際秩序の「ゲームの規則を定めてこそ、強大な国家となれる」（第五章）。西側による包囲を打ち破り、中国に対する認識を改めさせ、志を立て「多極世界における“英雄国家”を目指せ」（第六章）。

3) 『中国夢 中美世紀対決・軍人要発言』（劉明福 中華書局 2010年）

先ず著者は、アヘン戦争を機に「中国が地球上で最も弱い国」と成り果てた時代に「中国を『世界第一の富強の国』にしようと呼びかけ4億の人民に『立志』を求めた」孫文を「偉大な先駆的精神の持ち主」と讃え、その「偉大な先駆的精神は今日の中国人をして感動させずにはおかない」とする。次いで孫文の発言から、「地球上の人類にとって最も光栄ある偉業は中国人こそが打ち立てるのである」「中華民族は世界で最も古い歴史を持ち、最も人口が多く、最も文明が発達し、最も強い同化力を持つ民族・・・世界で最も優秀な民族である」「実業を発達させるためには『対外開放』しなければならない」「模倣では『世界第一』は不可能であり、必ずや『独創の精神』が必要である」「強大な軍備がなければ、国家は立ち行かない」「アメリカを学びアメリカを超越する」などを挙げながら、『世界第一』という中国百年の夢想の実現を訴える。獅子吼する。

大躍進を掲げた毛沢東も、改革・開放路線を領導した鄧小平も、孫文と同じ「世界第一主義者」であり、世界第一の中国こそが、①発展途上国が先進国を打ち破り、②中国の特色を持つ社会主義が世界最大の資本主義国より優れ、③東方文明が生命力・創造力で西方文明を凌駕し、④白人優越主義を退け、⑤西欧中心の優越感を打ち砕く。かくして「現に

進行中の中国が世界一になるという偉業は、経済的意義にとどまらず、政治的・文化的意義を秘め、将来の中国にとつともなく大きな政治的・道義的資源をもたらすことになる」と胸を張り、世界第一の中国を支える前提にアメリカを凌ぐ軍事力の必要性を力説する。最後に「政治的・道義的資源」を備えた世界一の中国は、①アメリカ式民主主義より優れた「『中式民主』の奇跡」、②福祉国家より均等の「『財富分配』の奇跡」、③多党政治より公平な一党独裁下での「『長治久廉』の奇跡」——3つの奇跡を人類にもたらすとする。

4) 『当中国統治世界』(Martin Jacques 中信出版社 2010年)

——国情に応じて多種多様の近代化の道があり、中国は自らの道を確認を持って突き進むがゆえに、近代化競争が激烈に展開される現代国際社会において、地球という競技場における核心的プレーヤーの役割を担うことになる。猛烈な速度で成長する中国経済は、すでに経済のみならず世界全体に根本的な影響を与え、それゆえに中国は国際社会において然るべき地位を一貫して占めるようになった。将来的に考えるなら、中国の影響力は拡大の一途を遂げ、いずれ西洋民族国家が占めてきた地球規模での指導力に止めを刺すだろう。これまで世界をリードしてきた西欧先進国家に象徴される発展モデルは、いまや中国が実践してきた“もう1つの発展モデル”の激烈な挑戦を受けている。中国が発展するにつれて西洋は世界文明を導く権能を失い、世界は中国的発想によって再び創り変えられ、中国こそが世界文化の覇主となる。崛起する中国は地球全体を改変し、地球は中国の色に染められる。つまり現に進行している地球規模での競争において、最終的勝者たるは中国でしかないのだ——

当然、アメリカ以下諸国の将来に対しては極めて否定的な分析が続くが、「日本が中国に對抗するほどの超大国に発展するなどというシナリオは、ありえない。その原因は至極簡単で、余りにも小さく、極めて排外的で資源が乏しいからだ」。「日本は中国の崛起に対する反応において、その本来的な弱点を曝け出した。日本はまさにウサギであり、前方からやってくる車のライトに驚き慌て我を見失う」と・・・。

5) 『崛起的大国 ——中国大趨勢』(馮凱編著 中華工商聯合出版社 2011年)

先ず「前言」で、「改革開放以来、中国経済の急激な発展は世界的な関心を呼ぶ。現在の勢いが持続できたなら21世紀の中華民族の偉大な復興は夢なんぞではないが、中国という龍が天空を奔放・闊達に疾駆することは必ずしも容易なことではない。民族の偉大な復興は数多くの困難と矛盾を克服した後にこそ実現しうるものだ。新しい状況において中国の発展と安全を求めるためには、より多くの人びとが、より積極的な戦略的思考と実践を積み重ねることが必要だ」と提唱し、中国大国化への道筋を示そうとする。

その道筋は「第一章 経済金融」からはじまり、「第二章 軍事政治」「第三章 現代法治」「第四章 科学技術」「第五章 国際外交」「第六章 文化教育」「第七章 社会福祉」「第八章 生態とエネルギー」「第九章 体育娯楽」「第十章 改革重点の総括と思考」と続き、

「第十一章 未来の展望」で終わる。

たとえば「第三章 現代法治」をみると、「法治は文明の発展段階における成果を体現したものであり、文明は法治実現の前提条件である。中国の法制建設は長年の弛まぬ奮闘を経ているがゆえに、中国人は自らの法治建設を愈々もって大切にする。法によって国を治め、社会主義法治国家を建設することは中国人民の主張であり、理念でもある。この理念を実現するため、中国共産党は 13 億中国人民を導き史上空前の偉大な社会実践に共同で参画する。悠久の歴史と煌耀な文明をもつ中華民族は、いままさに民主と法治の大道を邁進し、人類の政治文明発展における新境地を開拓し創造すべく努力を積み重ねる」と“大見得”を切った後で、各論に移る。

①国際的人権活動への積極参加、②食品安全関連法規の完備、③防災・減災関連法規の充実・発展、④労使協調による労働関連法規の完備、⑤穏健な家庭と和諧（調和）社会を保障する婚姻法の完備、⑥中国の法律文化と社会の実情に基づいた死刑制度の改革・完備、⑦行政サービスを円滑に進めるための費用徴収制度の完備、⑧法体系全体における整合性の構築、⑨「国家、社会、人民による全方位からの支持」を背景とする徹底した麻薬禁止活動の推進、⑩「貧富の格差を平準化する重要な手段」である徴税における不公平感の是正と税法体系の公正化の整備と徹底、⑪歴史的伝統遺産と民間芸術保護のための法体系整備、⑫個人情報保護関連法規に関する初歩的検討、⑬司法の公正と政治的中立――

以上が「中華民族の偉大な復興」の証としての大国化の法治面からの「より積極的な戦略思考」ということになる。

6) 『中華文明的根柢 民族復興的核心価値』（姜義華 上海人民出版社 2012 年）

「いま中国は崛起している。中華民族は大復興を成し遂げつつある。これは既に争うことの出来ない決定的な事実だ」という基本認識に立ち、著者は「中華民族の復興はマルクス主義の中国化、中国の特色を持つ社会主義建設と極めて密接に関連している」とした後、「中国化、中国の特色とは、とどのつまり中国の現実に依拠し、当今の世界の実情に立脚し、歴史が我らに与えてくれる各種の資源とすべての客観条件を十分に活用し、中国自身の発展の道を歩み、中華文明自身の発展の道を歩むことである」と記した後、中国、中華民族、中華文明を連呼する。

アヘン戦争以後の近現代において、「中国、中華民族、中華文明は西洋資本主義による空前の激越な挑戦に曝され」、「数千年来、いまだ遭遇したことの無いような危機に陥った」。だが「中国社会の精鋭、草の根の大衆は身を挺して決起し、国家主権の守護、民族独立の防衛、自らの偉大な文明の復興のため次々と死を賭して戦った。民族復興は人びとが 1 世紀半以上にわたって共に奮闘を続けた必然的な結果であり」、「中国は中国自身の道を歩むしかない、中華民族は自らの道を進むしかない、中華文明は中華文明の道を進むしかない」ということを、人びとが愈々もって明確に認識するようになった」と主張する。

これまで共産党は 1949 年を境に、それ以前を「旧中国」、以降を「新中国」とし、前者

を全面的に否定する一方で、後者を無条件に讃えた。毛沢東が創建した共産党があったからこそ、外からの帝国主義と内なる封建地主勢力から中国人民を解放し、それゆえに毛沢東は建国宣言に「他から侮られない民族になった」との一句を加えはずだ。

だが著者の主張に従うなら、やはり従来から行われてきた中国を「旧」と「新」とにお峻別する“公式的歴史認識”は否定されることになる。「中国社会の精鋭、草の根の大衆は身を挺して決起し、国家主権の守護、民族独立の防衛、自らの偉大な文明の復興のため次々と死を賭して戦った」ということは、共産党だけが戦ったわけではないことを意味してもいよう。「旧」も「新」もない。中国は一貫して中国だった、ということか。

かくて著者は「中国は中国自身の道を歩むしかない、中華民族は自らの道を進むしかない、中華文明は中華文明の道を辿るしかないということを、人びとが愈々もって明確に認識するようになった」ゆえに、「いま中国は崛起している。中華民族は大復興を成し遂げつつある」と熱く語り、「大一統（漢族による単一民族国家を棄て、多民族によって統一された単一国家体制）」「家国共同体（個人⇒家庭⇒家族⇒民族⇒国家を一貫する同心円的的社会共同体）」など伝統的統治思想に基づく「中華民族の核心的価値観」を“一心不乱”に称揚する。

著者は「中華民族の大復興」を支える大きな柱であろう経済力の淵源を、「中華経済倫理の核心的価値観」——「義を以て利を制し、道を以て欲を制する」——に求めている。「義を以て利を制し、道を以て欲を制する」とは至言であり、理想的な儒商（儒教を体現した商人）の商人道だ。

7) 『中国人太多了嗎?』(梁建章・李建新 社会科学文献出版社 2012年)

人口政策失敗例に日本を挙げながら、議論が展開される。このまま一人っ子政策を続ければ若者人口は激減し、科学技術は後退し、活力なき社会が出現し、中国の成長は頓挫し、日本のように停滞一途の道を転がることになる。だから日本のようになりたくなかったら、ともかくも産めよ増やせよ、である。中国の将来を考えると食糧、問題ない。環境、問題ない。新エネルギー開発、全く問題ない。著者は万事に問題ないと胸を張る。ともかくも多産奨励の一点張りで威勢がいいが、それだけに手前勝手に危うい主張が繰り返される。

たとえば「中国は民族関係と貧富の差に起因する社会の不公平問題さえ処理すれば、社会の安定は保てる。ならば今後の10年~20年の経済成長によって、中国人の平均年収は2万米ドル超となり、高等教育普及率は50%を越え、中国の政治体制の安定と改革のリスクは大幅に低減する」と言い張る。だが、「民族関係と貧富の差に起因する社会の不公平問題」をどうやって「処理」するのか。「政治体制の安定」はどう確保するのか。「改革のリスク」を如何に回避するのか。その点への具体的言及はみられない。

改めて冒頭の「引言」を読み返すと、「可及的速やかに現行産児政策を転換しないかぎり、中国は将来、子供の数が最も早い速度で減少する国家の1つになってしまう」と危機感を募らせている。

8) 『中国在梁莊』(梁鴻 商務印書館 2011年)

・農民の都市労働者化

農地を失う農民(帰るべき故郷の喪失)

両親に育児を任せる(家族の崩壊)

農業の担い手の減少(農地の荒廃)

・高速道路網の整備(従来の生活圏=地域社会の崩壊)

⇒中国の根幹であった農村社会は確実に崩壊に向かっている

「故郷の村は全く改造されてしまったというわけではなく、多くのものが遺され保たれている。そのなかから我われは一つの民族としての心の奥底の思い、愛、善、純朴、篤実、質素、親愛などを認め、それらを失った。将来にわたって我われは、より多くを失うかもしれない。この旧態依然たる故郷の村と農民の心根の存在こそが民族の自信、民族独特の生き死にの仕方であり、そうした心の動きがあってこそ、永遠の生命力があるといえるのかもしれない」

参考】「ノーといえる中国」

- ①宋強・張蔵蔵・喬邊『中国可以説不』明報出版社(香港) 1996年8月
- ②張学礼『中国何以説不——猛醒的睡獅』華齡出版社 1996年9月
- ③彭光謙・楊明傑・魯石『中国為什麼説不』新天出版社(香港) 1996年11月
- ④彭謙主編『猛醒吧、日本 日本政治走向警示録』新世界出版社 1996年11月
- ⑤賈慶国『中国不僅僅説不』中華工商聯合出版社 1996年11月
- ⑥李正堂『為什麼 日本不認賬 日本国戦争賠償備忘録』時事出版社 1997年1月
- ⑦李述一・雍建雄『21世紀中国崛起——世紀末世界輿論關注熱点』中共中央党校出版社 1997年4月
- ⑧高平・唐芸・陽雨編著『血債 対日索賠紀実』国際文化出版公司 1997年5月
- ⑨師傑『与彼為隣 中国対日本説』昆崑出版社 1997年7月

■『中国何以説不——猛醒的睡獅』(華齡出版社 1996年9月)

- ①「不」をいうということは、どういう意味なのか。当然のように中国は他から軽んじられバカにされるわけにはいかない。中国は世界における平等の権利を獲得すべきであり、不平等の待遇には敢えて反対すべきである。現在の世界は太平で豊かな世界ではないが、正しくあらねばならない。不服・不満なら声を挙げることこそが、天下の正しい道というものだ。中国は大国だが、過去何百年来の中国の歴史は屈辱の歴史でしかない。当時の中国人は敢えて「不」とはいえなかった。今世紀の40年代末のこと。世界の東で雷鳴が轟いた。中国人が立ち上がったのだ。だが貧乏という帽子を取り去ることはできなかった。「不」の声が大きく響くことはなかった。

80年代以来、中国は改革開放を実行し、猛烈な速さで発展し、国民総生産は10年連続

で 10 パーセント以上を達成したが、これは世界各国の例に照らしても稀有なことだ。このような速さでの発展を今後 10 年から 20 年続けることは完全に可能なことだ。中国は自らの新しい歴史を生み出し、新しい姿を形作るのである。

②明代後期、ことに清朝に入り、朝廷の巨大な錠前によって中国の山河が固く閉じ込められてしまった。封建王朝の腐敗、帝国主義列強による蚕食、軍閥による独裁統治と、古い歴史を誇る文明国は永遠に回復困難な状態にまで押しとどめられてしまった。時を越えて中国は、20 世紀の 78 年に改革開放に踏み切る。まさに春を告げる春雷が鳴り響いた時こそが時代の変り目となったのだ。古い歴史を持つこの国は数えれば 500 年近くの間、眠り呆けていたことになる。この間、人類は発達を遂げ、世界は巨大な変化を経験した。にもかかわらず、中国は大発展の機会を幾度となく失ってしまった。19 世紀中葉における世界規模での工業革命において好機を逃しただけではなく、我が国の歩みは 20 世紀 50 年代以後に起こった科学革命の波からも 20 年から 30 年の遅れをとることとなった。第 2 次大戦後、日本は 20 年の時間で廃墟の上の経済大国を築き上げた。(中略)輝かしい文明をもつ大国は、世界から遙かに遠くの落伍した地点に置きざりにされてしまった。中華の心ある人々は、この間の歴史に思いを致すごとに、切齒扼腕し嘆かないことはなかった。

③連係の 1 = 東南沿海地方に形成された物質的基礎こそ技術経済の基礎であり、今日でも依然として有用な働きを持つ。

連係の 2 = 古くから南方で形成された商業の伝統と商業精神は、今日でも依然として有用な働きを持つ。

連係の 3 = 歴史的にいうなら沿海地方は海外文明の力を借りてきた。だから現在もなお海外文明の力を借りなければならない。

・・・・・・わが国の開放と経済発展はこのように地理的条件に基づいて進展し、地縁政治学と地理経済学における重要な研究の対象と内容となりうるのだ。5 千年の歴史を俯瞰するに、中国の発展方向において 3 つの相反する変化が起きている。第 1 次は東から西、つまり中原から西部に転じ、第 2 次は西から東、南に向うこと数千年間。第 3 次は南から北、西に。これは明代から現在まで数百年続いている。

④「接軌」という考え⇒世界の「軌」に「接」することで、毛沢東時代までの閉塞状況は打破できるし、中国の飛躍は可能となる。

(二〇一三・一・仲一 記)